和泉國石津

〔夫木和歌抄二十六津〕いしつ　和泉

〔倭名類聚抄六國郡〕和泉國大鳥郡石津以之都

〔土佐日記〕五日、〇承平五年二月けふからくして、いづみのなだより小津のとまりをおふ、〇略中石津といふ所の松原、おもしろくてはまべとほし、

〔更科日記〕さるべきやうありて、秋頃和泉にくだるに、よどといふよりして、道のほどのおかしうあはれなる事、いひつくすべうもあらず、〇略中冬になりてのぼるに、おほえと云うらに船にのりたるに、その夜雨風、いはもうごくばかりふりふゞきて、神さへなりてとゞろくに、浪の立くるをとなひ、風の吹まどひたるさま、おそろしげなること、いのちかぎりつと思ひまどはる、をかのうへに舟をひきあげて夜をあかす、雨はやみたれど、風なをふきて船いださず、ゆくゑもなきをかのうへに五六日をすぐす、からうじて風いさゝかやみたるほど、〇略中くにの人々あつまりきて、その夜この浦をいでさせたまひて、いしづにつかせ給へらましかば、やがて此御舟、なごりなくなりなましなどいふ、心ぼそうきこゆ、

ある、海に風よりさきに船出していしづの波と消なましかば

〔平範國朝臣記〕高野山御參詣記

永承三年十月十一日□子、〇此間文闕廟令參紀伊國金剛峯寺給〇藤原頼通十二日丁丑、於和泉國石津湊令用御馬給、西風尚不止、前途依有憚也、

〔白山本神皇正統記後醍醐〕又のとし戊寅の春二月、〇延元三年鎮守府大將軍顯家卿、また親王〇後村上をさきだて申し、重ねて打のぼる、〇略中同五月、和泉の國石津といふ所にての戰に、時やいたらざりけん、忠孝の道こゝに極り侍りにき、苔の下にうづもれぬものとては、たゞいたづらに名をのみぞ留めし、心うき世にも侍るかな、